

総科の 明日を読む



- ・ 総科大学院設置の動向
- ・ どうなる総科？

行かれて進行状況
などを説明してい

・総合科学研究科設置への動きが活発にな
っているようですが、設置計画の概略を聞
かせてください。

成定先生「平成十八年四月設置を目標にし
ています。そのためには十七年の六月三十
日まで大学院の設置計画書を文部科学省
に提出しなければなりません。今はその検
討を進め、学内での調整も進めているとこ
ろです。」

・調整とは具体的にどういう作業なんです
か？

成定先生「どういう研究領域や分野、授業
科目を設け、誰がそれを担当するのかを決
めること。だいたいは今おられる総合科学
部の先生方を想定して考えています。」

この調整は、設ける研究分野、学生の教
育を担当する先生方の研究内容と照らし合
わせて、それぞれの講義を担当するのが
ふさわしいのかを文部科学省に示すために
必要なんです。百人以上の先生方それぞ
れの研究内容に則してプランニングするこ
とは大変な作業なんですよ。

すでに、文部科学省にも学部長が何度か

成定先生「他研究科との折り合いがつかなかったんです。最近は大学の先生が所属や肩書を書く時に、何々大学何々研究科と書くようになったんです。他部局はこの移行が順調に進んだのですが、総合科学部の教員だけその移行が進まず、他部局に協力して後回しになってしまったという事情があるわけです。」

そして他部局の移行が終わって、さあ次は総科の番だ、ということになるはずなのですが、総科の先生方は他の研究科に協力講座というかたちで参画している。各研究科に所属している総科の先生がその研究科から離れて、新しくできる総科の研究科に移るといのは、他部局からしてみると、あまり多い人数に抜かれると困るといふ事態になって、この辺の調整がいままではうまくいかなかったんです。」

・今回も同じようなことが起きるといふことはないんですか？

成定先生「今回は法人化して大学執行部のリーダーシップの下、大学全体としての研究科はどうあるべきかを考えたとき、総合科学部にだけ大学院がないのは問題だといふ方針も出されて、執行部が調整して話を進めてくれている。いままではだいたい状況

況が違います。」

目玉教授が来る!?

成定先生「まだまだ計画段階で実現するかどうか不明ですが、目玉になるような著名な研究者（外国人も含めて）に来てもらいたいと考えています。話題性があって、学生たちにもどきどき感を与えられ、歩く総合科学のような人が理想。普通に講義をするのではなく、月に一度とか休み中に来てもらって集中的に教えてもらうなども視野に入れて考えています。法人化されたことによってこのようなことを考えることが可能になったんですね。」

最後に、総合科学大学院設置に求めることは？

成定先生「総合科学研究科の設立の根幹にあるのは、二十一世紀の課題に総合科学的な視点で取り組みたいということ。二十一世紀の課題とは、具体的には環境問題や人口増加の問題などが挙げられるでしょう。また、二十一世紀とはいっても過去の問題も見つめ直さなければなりません。こ



成定先生

これらの問題の幅がとても広いため取り組む側も広い視

野を持たねば対処できません。

しかし、研究者は一般的に自分の専門という狭い領域に閉じこもり、専門外のこととなると、「それは私の専門外だから」の一言で片付けてしまうことが多いんです。これは問題解決は望めない。そこで、総合科学的アプローチが必要となってくるのです。そのため、新しい研究科では「21世紀科学プロジェクト研究」部門を設けて、教員と学生が一体となって研究に取り組む仕組みを考えています。

過去三十年間、総合科学部はそのような総合科学的な視点で問題を解決して行こうと取り組んできた。総合科学研究科を作ることによって、学部教育と一貫したかたちで問題に取り組めるようになり、よりいっその成果が期待できる。だから、総合科学研究科は必要なんです。」

成定先生「協力ありがとうございました。」

昨年三十周年を迎えた総合科学部。この新しい学部について飛翔は何度も特集を組んできました。他にもシンポジウムや超越研究などで総科の理想を語り合う場面もあつたはずです。そしてその理想へ向けて大学院設立計画やプログラム制への移行、他にも大学の独法化など総科はさまざまな変革のときを迎えています。みなさんも華々しい理想を語る先生方を見て、総合科学部にはまだまだ可能性が秘められているのではないかと、思っているのではないのでしょうか。しかし噂に「独法化が一番危ないのは総科ではないか」ということも聞き、一抹の不安を覚えることも確かにあります。これからの時代でも総科は大丈夫なのか？ということを高谷先生に伺いました。

ズバリお聞きします。総合科学部がなくなるようなことはありませんか？

それはありません。

総合系の大学院がきょうとしていくような時に誰がそんなことを言っているのですか？

研究室や研究費などが減っていると聞きました。どうなのでしょう？

確かに教員の数は減ってきています。現在の総合科学部の教員はだいたい170人ほどいるのですが、十年程前が一番多い時で240人ぐらいいました。しかし、それは当時の学生数が今と比べて多かつたからです。教養教育は全学的な組織で請け負っていて、そのなかでは総合科学部の教員が多くを占めています。そのせいで学生全体の数が減ったことが大きく影響したのだと思います。ですから特に総科の教員数が削減されているというわけではありません。研究費にしても独法化で分配方法が変わったといつていいです。

どのように変わったのですか？

あまり詳しくは言えませんが、今は教員一人に基礎研究費が出ていて、そこに加えてゼミ生や院生を受け持つとその人数分基礎教育費というのが出ます。それほど減ってはいないという説明は受けましたが、多くの教員の方が独法化で研究費が減つたと感じているようです。

それから独立行政大学法人になって今は自分で研究費を取つてこなければいけないということになり、総科の教員のみなさんはほとんど科学研究費の補助金に応募しています。そのほかにも企業の研究援助などにも応募しています。将来的には人によつ

どうなる総科？～総科に明日はあるのか！？～

問

学生にとって一番の泣き所が授業料なのですが、また上がりますか？

答

そうですね。授業料の設定に関しては各大学の判断となりました。ですからこれから大学が研究や教育をしつかりやっつけていこうと思えばやはり上がって行く傾向にはあるでしょう。しかし今はまだ移行期間なのでこの大学もたいした差はありません。それに上げるにしても限度が定められているので、急激に上がるということはないでしょう。

問

プログラム制や履修に関してこれから変わっていくのですか？

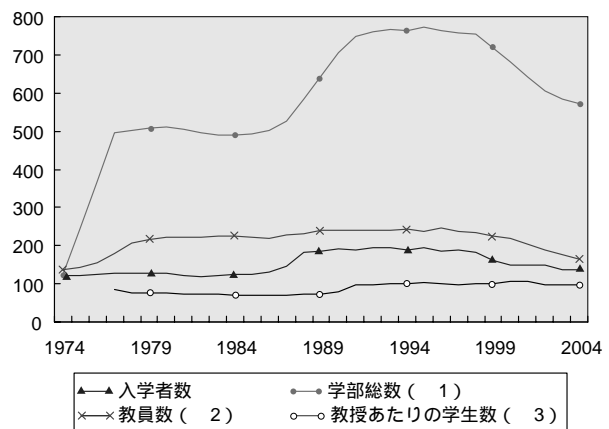
答

プログラム制は継続的に見直しを行っています。プログラム制の第一期生が今年卒業しますので、それにあわせて以前とったアンケートと今年とったアンケートを使って思索しているところです。履修に関しても細かいところで多少は変化していきます。ですが今、検討しているものが実施されるのは早くても平成十八年度以降になるでしょう。

取材を終えて

ちらちらと伝え聞く総合科学部の悪いわさが杞憂に終わってよかった。確かに調べてみると高谷先生が言われたとおり、第二次ベビーブームのころに学生がとて多くなりそれと比べると減ってきているということがよくわかる。このグラフでは以前に比べて教員の数がだいぶ減っているように見える。しかし教員数(2)の中には助手と講師を含んでおり、教授あたりの学生数(3)は変わっていないので特に減っているわけではない。それどころか一年で考えると教授一人に学生一人と他学部比べて、とても恵まれている環境であるといえる。

高谷先生はこの様な事も言われた。単位がもらえるから勉強するのではなく、教授を巻き込んでゼミをつくったり、仲間ですとつこの事を勉強したりと自主的に勉強に取り組めばどうだろうか、と。確かに学ぶにはいろいろな条件が必要だが、総科には最も重要な「人」という土壌がある。それを考えると、総科の未来は少し明るそうだ。



- (1) 四年間の入学者合計なので実際の在籍者数とは少し異なる。
- (2) 教授、助教授、講師、助手の合計人数
- (3) 講師と助手は含まず、教授と助教授あたりの学生の割合。値はそれに100をかけたもの。四年後の卒論時を仮定して計算。

どうなる総科？～総科に明日はあるのか！？～

総合科学部の理念

(H16年度 学生便覧より)

総合科学部は、総合性、学際性、創造性を理念の柱とし、総合的知見と思考力を涵養するため、高度教養教育(リベラル・エデュケーション)をおこなう。

- 1、複数の分野にまたがる学際的な領域や、既存の学問的枠組みを越えた新領域への知的関心を喚起し育成する。
- 2、深い観察、独創的な実験、豊かな想像力によって、固有の知的空間の創出を目指す。
- 3、つねに学問的関心を抱きつづけ、たえず新しい知的状況に対応できる、自己を発見し革新してゆく自主的・自立的な人間を育成する。
- 4、異文化とその底に流れるエネルギーを深く共感理解すると同時に、自己を説得力をもって呈示することの可能な、国際社会に活躍できる人材を育成する。

総合科学部が総合科学をはじめとして三十年。飛翔のOB紹介をみてもらえばわかると思いますが、すでにたくさんの方がさまざまな分野で総合科学部卒業生として活躍しています。そのOBの方も私たちも学部生として総合科学部の教育を受け、抽象的な理想をどのように実現するか考え、悩んできたのではないのでしょうか。

一方で研究としての総合科学はどうなっ



ているのでしょうか。総合科学部でも研究論文をまとめた紀要を毎年発行していますし、総合科学研究プロジェクトも行われていて、飛翔でも紹介しています。プロジェクトでは総合科学にふさわしい研究が選ばれて支援を受けて研究しています。しかしどのような研究が行なわれているのかあまり知らないことが多く、なじみが薄い気がします。

話は飛びますが今、大学は地域協力と文理融合を目指して様々なプロジェクトを行なっています。しかし地域協力のプロジェクトと言っても今の所、住民からの要望に応じて研究を行なうといったようなものです。

今までの話で私が何を言いたいかというと総合科学部に望むものは総合科学の実社会への応用だと言うことです。確かに大学の主な目的は研究と教育です。しかし、設立当初の考えにはこのようなことも書いてありました。「現代社会の問題は専門化細分化の末に起きた現実を省みない成果によってもたされた。それを解決するための総合科学である」と。三十年を経てようやく問題を解決するための総科大学院と言う場所を得たのではないかと思います。

昨年の三十周年記念シンポジウムでパネリストの瀬名秀明先生が実装と言う言葉を



用いられました。もちろんその意味は実社会への応用です。どうやって総合科学を使うのか、どの様に大学がかかわっていくのか。これにはまだまだ議論の余地があると思います。大学院設立に伴って二十一世紀科学プロジェクトといったようなものも構想されています。それに加えてこれからは総合科学部全体として社会の問題に対してどのような事を行なっていくのか考えてほしいと思います。それだけの事が総科では出来るでしょうから。

(担当 16生 田中栄一郎)

このコーナーは他、16生 森尾陽一、高橋征志が担当しました。

